

じゅりょうほん
寿量品

我れ佛を得てよりこのかた 経たる所の諸の

劫数 無量百千万億載阿僧祇なり

常に法を説いて 無数億の衆生を教化して 佛道に
入らしむ

爾してよりこのかた無量劫なり

衆生を度せんが為の故に 方便して涅槃を現ず

而も実には滅度せず 常に此に住して法を説く

我れ常に此に住すれども 諸の神通力を以て

顛倒の衆生をして 近しあいえども而も見ざらしむ

衆我が滅度を見て 広く舍利を供養し 咸くみな

恋慕を懷いて渴仰の心を生ず

衆生既に信伏し 質直にして意柔軟に 一心に佛

を見たてまつりんと欲して 白り身命を惜せられ
ば 時に我れ及び衆僧 倶に靈鷲山に出ず
我れ時に衆生に語る
常に此にあつて滅せず 方便力を以ての故に 滅不滅
ありと現ず
余国に衆生の恭敬し 信樂するものあれば 我れま
た彼の中に於て 為に無上の法を説く
汝等「れを聞かずして 但だ我れ滅度すとおもえり
我れ 諸の衆生を見れば 苦海に沒在せり
かるがゆえに為に身を現ぜずして それをして渴仰
を生ぜしむ
その心恋慕するに因つて 乃ち出でて為に法を説く
神通力はの如し

阿僧祇劫において 常に靈鷲山および余の諸の
住処にあり 衆生劫つきて大火に焼かるると見ると
きも 我此土は安穩にして 天人常に充满せり
おんりんもろもろ どうかく しゅじゅ たから もつ しょうごん
園林諸の堂閣 種種の宝を以て莊嚴し
ほうじゅけかおお しょじょう ゆうひや といふ
宝樹華果多くして 衆生の遊樂する所なり
しょてんてんくう つねにしゅ まんだらけ
諸天天鼓を擊つて 常に衆の伎樂を作し 曼陀羅華
ふら ほとけおよ たいしゅ さん
を雨して 佛及び大衆に散ず
わ じょうど やぶ しか しゅ や つ
我が淨土は毀れざるに 而も衆は焼け尽きて 憂怖
もろもろ くのう かく じる じるじる じゅうまん
諸の苦惱 是の如き 悉く充满せりと見る
こ もろもろ つみ しゅじゅ あくいわ いんねん
是の諸の罪の衆生は惡業の因縁を以て 阿僧祇劫
す さんぼう みな き
を過ぐれども 三宝の御名を聞かず
もろもろ くじく しゅ にゅわしつぢき
諸のあらゆる功德を修し 柔和質直なるものは
すなわ みなわがみ ほう と み
則ち皆我身ににあつて法を説くと見る

或る時は此の衆の為に 佛寿無量なりと説く

久しうあつて 乃し佛を見たてまつる者には 為に

佛には値い難しと説く

我智力かくの如し

慧光煩すこと無量に 寿命無数劫 久しう業を修し

て得る所なり

汝等智あらん者 此に於て疑いを生ずること勿れ

當に断じて永く尽きしむべし

佛語は實にして虛しからず

医の善き方便を以て 狂子を治せんが為の故に 実

には在ども 而も死すと言つに 能く虚妄を説くも

の無きがごとく 我も亦これ世の父 諸の苦患を

救う者なり

凡夫の顛倒せるを為て 実には在れども而も滅すと
い 言つ

常に我を見るを以ての故に 而も憍恣の心を生じ
つね われ み もつ ゆえ しか きょうし いふ しょう

放逸にして五欲に著し 惡道の中に墮ちなん 我れ
ほうじつ ごよく ばやへ あくじゅう なか お わ

常に衆生の道を行じ 道を行ぜざるを知つて 度
つね しゅじょう どう きょう どう あくよう し
すべき所に随つて 為に種種の法を説く
といふ したが ため しゅじゅ まよ と

毎に自らの念を作す
つね みずか ねん な

何を以てか衆生をして 無上道に入り 速に佛身
なに もつ しゅじゅ むじょうじゅ い すみやか ぶっしん
を成就する」とを得せしめんと
え